



スターリンは何故こだわったのか!?

キエフ 死守命令の 蹉跌

Київ

赤軍に大損害をもたらしたキエフの戦い。
スターリンと軍上層部のやりとりから、
未曾有の攻防戦を再検証する。

文=守屋 純

激しい攻防によって互壊と化したキエフの町並み。(上)キエフ死守に固執したスターリン。

第二次大戦の東部戦線におけるヒトラー最大の失策が、一九四二―四三年のスターリンググラーフ戦であるのは衆目の一致するところである。ではスターリンの場合はといえば、一九四一年のキエフ包囲戦といえるだろう。

だが、これまでキエフ包囲戦については、ほとんどドイツ側での論議、すなわち後続のモスクワ攻略「台風」作戦との関連で問題にされ、なぜソ連側がこのようにひどい失策を冒したのかについてはあまり語られなかった。一方、ソ連側では、この最大の敗北について単にスターリン個人の失策としてかたづけられ、「臭いものに蓋」の扱いでさほど真剣にその意義は追求されていない。

ここでは、主としてソ連側から見たキエフ包囲戦の経過をたどることによって、スターリンとソ連側に何が起こり、その後の戦争の経過にどのような影響を与えたのかを検証してみよう。

電撃戦戦術の内包する矛盾と キエフ大突出部の形成

「バルバロッサ」作戦の発動時、ドイツ側は北方・中央・南方の各軍集団(Herzgruppe)をバルト海から黒海

に到る約三〇〇〇キロの戦線に連続して配置していた。これは戦線での破孔を作らないためと、敵が後方へ迂回するのを防止するためである。

連続戦線という考え方は第一次大戦で生まれたもので、あくまで歩兵と砲兵を主力とし、戦車は支援兵器として歩兵に合わせた緩慢な速度で前進することを前提にしていた。これによって無用な突出部の形成をふせぎ、同時に敵の突破の試みを逆包囲によって撃滅しようとした。

「バルバロッサ」作戦時のドイツ軍の各軍集団には、それぞれ南方に第1(クライスト上級大将)、中央に第2(グデーリアン上級大将) および第3(ホット上級大将)、北方に第4(ヘブナー上級大将)の各装甲集団が先鋒として配置され、これを空軍の航空艦隊が支援することになっていた。歩兵と砲兵を主力とし、緩慢な前進を前提とする第一次大戦型の戦闘形式を打破した「機甲戦術の始祖」ハインツ・グデーリアンの持論によれば、進撃のスピードこそ作戦の成否を決する要諦であるという。すると、ここで生まれる問題は、仮に部隊を連続的に配置していたとしても、これはど長距離にわたる

*航空艦隊=ドイツ空軍における最大の編制単位。「バルバロッサ」作戦では、第1航空艦隊(北方軍集団支援)、第2航空艦隊(中央軍集団支援)、第4航空艦隊(南方軍集団支援)が投入された。



バルバロッサ作戦開始前の独ソ両軍の展開状況。ソ連はポーランドとバルト三国の併合によって、西方に領土が拡大していた。キエフは、防御ラインであるスターリン線の内側にあり、スターリンにとって守るべき都市のひとつといえた。

戦線を、全部隊がほぼ一直線・同一速度で前進することがそもそも可能なのか、ということである。

だが開戦前、ゲデーリアン以下ドイツ側では誰もこのような矛盾の存在には気づかなかった。

現実の対ソ戦では作戦開始直後から、

ドイツ側の各部隊の進撃速度に大きな差ができ、戦線が鋸歯状に入り組んで各所に危険な突出部が形成されていた。その最大のものがキエフ大突出部である。

「突出部」英: salient、独: Vorsprung、露: выступは、各部隊の進撃速度の差によってどうしても生じてしまう。

しかし、「バルバロッサ」作戦で形成されたキエフ突出部とその包囲戦の規模は他に比べるものがなく、最大時

日本の本州より広い面積の地域が舞台となった。ではなぜキエフ突出部は形成されたのか。

六月二十二日に「バルバロッサ」作戦が始まったとき、ドイツ軍に對峙したソ連軍は北西部(クズネツォフ中將、西部(パプロフ上級大將)、南西部(キルボノス上級大將)の各方面軍(front)をそれぞれ展開させていた。

事前のドイツ側の分析によると、戦力比は「北方: 互角」、「中央: ドイツ側の圧倒的優勢」、「南方: ソ連側優勢」とされていた。この予想は必ずしもまちがいはなかったが、それでドイツ側の勝利が約束されたわけではなかった。

まず緒戦で西部方面軍は、開戦第一日目から司令官パプロフがドイツ軍の空襲によってパニック状態となり、麾下各部隊との連絡も遮断され、司令部として機能しなくなるほどの惨敗ぶりとなった。そして六月三十日までにドイツ軍によるミンスク包囲環が達成され、これによってソ連側の損害は戦死・捕虜・行方不明あわせて四万人にもおよんだ。こうしてゲデーリアンとホートの両装甲集団は、七月十日にはドニエプル渡河を達成し、いよいよスモレンスク攻略に臨もうとしていた。

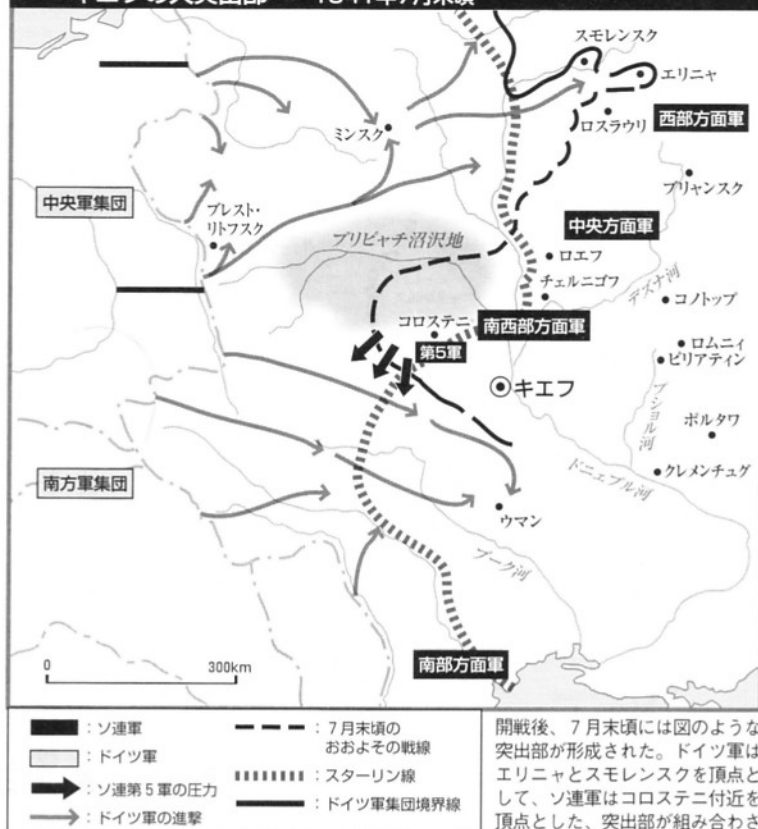
これに對して、ウクライナに配置されていた南西部方面軍は、開戦前にすでにキルボノスが「ドイツ側を挑発するな」とのスターリンからの厳命を無視して、内務人民委員部(NKVD)の国境警備隊と緊密に連絡し麾下部隊を警戒態勢に置いていたため、ドイツ軍の攻撃が始まってからも有効に対処することができた。特にボタポフ中將の第5軍は、ドイツ中央・南方両軍集団の作戦境界で大きな間隙が生じていたプリピャチ沼沢地帯南方から、ライヘナウ指揮のドイツ第6軍の側面を攻撃して進撃速度を鈍らせた。そのため南方軍集団の先鋒である第1装甲集団は、ドニエプル河に沿って南東方向に進出せざるをえなくなった。

こうして七月末にはキエフとその西方コロステニを頂点とし、ドニエプル河に沿った巨大な三角形の突出部が形成されていた。そして独ソ両軍は、それぞれ中央軍集団右翼と南西部方面軍右翼が互いに接して晒しあう状況になった。

スターリンとジューコフの対立

スターリンは開戦前、ドイツ軍の主攻撃方向をウクライナとみなし、その

キエフの大突出部——1941年7月末頃



ためキルポノスの下には最大兵力が配置されていた。キルポノスはスターリンの期待を裏切らなかったが、パブロフは予想に反して大敗を喫し、ドイツ軍は容易にスモレンスクに達することができた。

ドイツ軍のスモレンスク到達後の七月二十三日、ソ連軍は「中央方面軍」を新設して西部と南西部の両方面軍の中間に配置した。ただし、この「中央方面軍」はわずか一か月後には「ブリヤンスク方面軍」に統合されることになった。さらには、モスクワ防衛のため三個軍よりなるモジャイススク防衛線を設定していた。これらの措置は、スターリンがこの時点でドイツ側の次の

ジューコフが進言した対応策の概念



主攻撃方向をモスクワと確信していたためであるが、混乱した措置であることは否めない。

しかし、参謀総長ジューコフは状況判断によって、パニックに近い状態のスターリンに七月二十九日、次のような策を進言した。

①南西部方面軍をドニエプル河東岸に後退させ、「西部」と「中央」の両方面軍とともに連結した戦線を構築する。これによって南西部方面軍右翼へのドイツ軍の圧迫を軽減するとともに、ドイツ中央軍集団の右翼を脅威し、それによってドイツ側のモスクワ直撃の圧力も軽減する。

②そのため、まずエリニャ橋頭堡の

ドイツ軍を排除して、ドイツ側にモスクワ攻撃の基地を与えない。

③キエフは当然放棄する。

だが「キエフ放棄」を聞くや、スターリンは激怒、ジューコフの証言によると次のようなやりとりがあったという。この証言の詳細は、日本では今回初めて紹介されるものである。

「スターリンは私（ジューコフ）をじっと見つめながら、いきなり甲高い声を出してつかつかってきこう言った。『キエフを見捨てるだ、何たるたわごとを言うか。私もこう答えた。

『同志スターリン、表現を違えようお願いします。私は参謀総長です。もし閣下が最高司令官として自分の参謀総

長がたわごとを言っているとお思いなら、私の職を解くべきです。お願いします」。これに対してスターリンは、「出ていけ、我々だけで君の案を検討する」。

こうして、キエフ突出部の危険性を早くから認識していたジューコフは参謀総長を解任され、新設の「予備方面軍」司令官となった。そしてドイツ中央軍集団が形成したエリニヤ突出部の排除作戦に専念することとなり、九月初めに彼はその任務を達成する。

ジューコフの後任の参謀総長にはシヤポーシニコフが任じられたが、彼は病身のために引退していた長老の軍人であり、とてもこの危急存亡の時に有効な活動を求めるのは無理だった。だがスターリンにとって、ジューコフを追いついた後、信頼できる参謀総長は他に思い当たらなかったのである。

スターリンとウクライナ

では、スターリンはなぜそれほどキエフにこだわったのか。それは、ウクライナ共和国の首都、ソ連第三の都市というだけでは説明できない。ウクライナ支配こそが、スターリン独裁体制の根幹をなすものであったのである。

一九二七年までにソ連共産党（ボルシェヴィキ）内の独裁権を握った党書記長ヨシフ・スターリンは、翌年から急激な重工業化を目指す「第一次五年計画」を開始する。この計画の最終目標は自前の軍需工業の育成であり、それに必要な資金調達の手段とされたのが「ヨーロッパの穀倉地帯」ウクライナからの穀物輸出だった。穀物徴発と農民支配の方法として、「富農撲滅」の名のもとに行われた強制的な農業集団化により、コルホーズ（集団農場）単位での穀物徴発が可能となった。

だが強制的な農業集団化と穀物徴発は農民の意欲を削ぎ、穀物生産も減少、特に一九三〇～三一年のウクライナの大飢饉では、スターリン自身の証言でも九〇〇万人の餓死者を出すほどになった。そのためウクライナでは共産党支配に対する反感が強く、スターリンは腹心のニキータ・フルシチョフをウクライナ共産党第一書記兼共和国首相に任じて、確固たる共産党支配体制の構築をはからせた。

ウクライナは穀物生産だけでなく、ドンバスの炭田をはじめとする鉱業資源も豊富で、さらに大河川が集中するため水力発電の中心地でもあり、スタ

ーリンにとってもヒトラーにとっても、最重要の戦略目標であった。そのためスターリンは開戦前から、ヒトラーの主要目標をウクライナと予想し、キルボノスの南西部方面軍に最大の戦力を割り当てた。だからスターリンにとって、抵抗もせずにもぎむぎキエフを明け渡すというのは、自分の支配体制の威信をゆるがす行為であり、ひいてはウクライナのソ連邦からの離脱の恐れさえ考慮せざるをえなくなることだったのである。

ソ連側の混乱

スターリンからのキエフ死守の厳命に対して、キルボノスは八月八日に電話でキエフ維持は可能、と請け合っており、これには方面軍軍事評議員フルシチョフも同意していた。

フルシチョフは、スターリン死後に編纂させた公刊戦史の中で、自分がいかにキエフ包囲の危険性を早くから認識し、スターリンに退却の意見具申をしたかを強調している。しかしそれは、フルシチョフの功績を讃え、スターリンの責任を追求するための政治的叙述であって、実際にはスターリンの忠臣として主人の意に沿うような報告を統

括していた。

キルボノスの保証に気をよくしたスターリンは、ますますキエフ維持にこだわって、八月十九日にはキルボノスに対して、ロエフ・ペレヴォロチュナの線でドニエプル河を守り、ドイツ軍の東進を阻止せよと命じた。だがすでにこの時、ドイツ側はグデーリアン装甲集団がクリチョフでソ連軍を撃破して、ソ連の「予備」と「中央」の両方面軍の境界を突破して前進していた。そこでソ連側は、西部方面軍の指揮を執っていたエリョーメンコ中将を新たに司令官としたブリャンスク方面軍を新設して、グデーリアン集団を阻止しようとした。

この時、作戦上の混乱はドイツ側にもあった。スモレンスク包囲後、グデーリアンが独断で東進したことで形成されたエリニヤ突出部が、逆にジューコフの予備方面軍に包囲されて動けなくなった時期、次の進撃目標をモスクワとするかキエフとするかで、ヒトラーと軍首脳の間で「統帥危機」と呼ばれる論議が起こっていたのである。この論議の過程でグデーリアンは自らエリニヤ守備の責任を放棄し、八月二十三日のヒトラーとの直談判によって第



キエフへの増援のため、ドニエプル河を渡河するソ連軍部隊。スターリンはキエフの維持にこだわったが、それによって南西部方面軍は壊滅的打撃を受けることとなった。

2 装甲集団全体を南転させ、キエフ包囲戦に加わることにした。

前述のようにブリャンスク方面軍はこの南転する第2装甲集団を東方の側面から阻止するのが任務であった。そしてエリョーメンコは航空機まで動員して、八月二十九日～九月四日に第2

装甲集団に猛攻を加えた。しかし寄せ集めの新兵団ではドイツ軍の進撃を止められず、九月十一日までに第2装甲集団はコノトツプーチェルニゴフの線にまで達し、南西部方面軍の背後に回り込める情勢となった。

これほど包囲の危機が迫っていながら、スターリン以下軍首脳が南西部方面軍の後退を認めようとしなかったのは、別の軍事的要因がある。ジュエーコフに代わった参謀総長シャポーシニコフは、スターリンの意をくんで、グデーリアンの攻撃目標が依然としてモスクワだと考え、そのためエリョーメンコにグデーリアンの東進を阻止させようとしたのである。一方、ジュエーコフは、すでに参謀総長を解任され「予備方面軍」を指揮してエリニャでドイツ軍を包囲中だったが、その情勢判断は的確であり、再三にわたってスターリンに南西部方面軍の後退を薦めていた。ジュエーコフの証言によると――

「私の意見具申は再三にわたって無視された。スターリンが言うには、今キルボノスおよびフルシチョフと電話で話したところ、二人ともキエフ放棄をすべき状況にはない、という。スターリン自身も、ブリャンスク方面軍によ

って、敵の撃滅はできないまでも阻止は可能と確信していたようだ」

この致命的な勘違いのために、東方に配置された部隊からの南西部方面軍への増援はほとんど行われなかった。そのかわり、これまで南西部方面軍の北翼に位置して、ブリビヤチ沼沢地帯南方でドイツ軍の進撃を有効に妨害してきたボタポフ中将指揮の第5軍は、八月十八日に「最高司令部」(STAVKA)命令によって、ドニエプル河東岸方向に移動させられた。これがキエフ防衛のためのソ連側の唯一の増援策だったのである。同時に残兵をかき集めて第40軍を編成し、これでキエフ東方のデズナ河の線でグデーリアン集団の南下を阻止しようとした。

だが、この第5軍の後退によって生じた間隙にヴァイクス指揮のドイツ第2軍が入り込み、南西部方面軍を北方から圧迫する形になった。さらに八月二十六日には、グデーリアンはデズナ河に到達、守備していたソ連第21軍は退路を絶たれてブリャンスク方面軍から遮断され、第40軍も弱体化のために後退を余儀なくされた。かくて九月初め、ブリャンスク方面軍と南西部方面軍の中間に間隙が生じたのである。

ソ連軍の苦戦

八月二十八日から、ブリャンスク方面軍麾下の第13軍が東方から第2装甲集団に攻撃をかけたが、戦力不足で逆に撃退されてデズナ河東岸に押し返されたため、九月二日からは方面軍全体で第2装甲集団の左翼に攻撃をかけ、それは十二日まで続いた。しかしこれを指揮したエリョーメンコもまた、グデーリアンの本当の攻撃目標はモスクワだと誤断していた。そのためエリョーメンコは、ブリャンスク方面軍の主任務は、第2装甲集団の東進を阻止することであって、南西部方面軍の支援だとは考えていなかった。

同じ時、北方のエリニャでは、先述のようにジュエーコフが突出部のドイツ軍撃退に成功して、独ソ戦初の勝利を達成していた。これに気を良くしたスターリンは、ジュエーコフをレニングラードに派遣する。

レニングラードに発つ前日の九月八日、ジュエーコフはスターリンに対し、グデーリアンの進撃を阻止するためにソ連側の全部隊をドニエプル河東岸のさらに東方へさがらせるよう進言した。だがスターリンからの返答は、「ではキ

エフはどうする？」というものだった。これに対してジュエーコフは、「まことに遺憾ながら、キエフは見捨ててこたになりましよう」と答えた。

結局、スターリンはジュエーコフの進言を無視し、九月九日にキルポノスに対して、西岸の第5軍、デズナ河東岸の第13軍の両軍をキエフ近くのドニエブル河東岸に移動させただけだった。だがもはや、南西部方面軍のどの部隊も現位置の維持がやつの状態だった。

こうして、南下するグデーリアンと北上するクライストの両装甲集団がキエフの東方で合流し、南西部方面軍全体の包囲が刻々と近づきつつあった。このあまりに明瞭な危機に際して、スターリン以下軍首脳の間では奇怪とさえいえる。九月十日のシャポーシニコフと南西部戦域軍(*Zapadnaya Armia)司令官ブジョンスイとの電話がそれをよく物語っている。

・シャポーシニコフ(以下、シ) …「(南西部方面軍所属の)第1騎兵軍団を至急エリョーメンコの指揮下に置き、ブリャンスク・南西部両方面軍間の間隙を埋めさせよ」

・ブジョンスイ(以下、ブ) …「敵は北方から南西部方面軍の右翼を脅

威しつつあり。第1騎兵軍団を移動させるのは何のためか。むしろエリョーメンコの行動に注目する必要がある。彼はグデーリアンの阻止に失敗している。南西部・南部両方面軍ともはや予備兵力なく、なおその上で一個騎兵軍団を移動せよとは何の意味ぞ?」

・シ …「すべて了解。南西部方面軍が戦うには後方の掩護が必要。ゆえに騎兵軍団を移動せしむ」

・ブ …「了解。総司令官に私見とブリャンスク方面軍の行動注視の要を伝達願う」

・シ …「そのつもり。以上」
九月十一日早朝、南西部方面軍軍事評議会から正式に全軍の後退要請があった。

「敵の戦車集団がロムニイとグライヴオロンに侵入。第40、21の両軍はこれを阻止できず。全方面軍をブシヨル河彼岸へ撤収の許可をもとむ。無電にて返信請う」

翌十二日午前二時の最高司令部からキルポノスへの電話――

「最高司令部は南西部方面軍が既定のごとく現位置にて戦闘を継続するを必須とみなす。既信のごとく、エリョー

メンコはコノトツプ北方の破孔を塞ぐ作戦に出ようとしている。ゆえに貴官は、ロムニイ付近の敵軍先鋒を撃破すべし」

これから数時間後のブジョンスイからの電信――

「南西部方面軍撤収の遅れは人的・物的に膨大な損失をもたらしかねず。もし全軍の撤収が無理なら、本官が最小限の部隊と装備を率いてキエフから後方の陣地帯に撤収せしめんとす」

断末魔の様相

ここまできてもなお、スターリンはキエフ死守にこだわり、ブジョンスイさえ臆病風に吹かれたとして南西部戦域軍司令官の地位を解任し、ただちにチモシェンコを後任として派遣することに決めた。さらにスターリンはキルポノスに電話で持論を力説している。このやりとりは、一年半後のスターリングラード戦の最終段階における、ヒトラーと第6軍司令官パウルスの交信を思わせるものがある。

「もし南西部方面軍がドニエブル河から撤収すれば、ドイツ軍はただちに同河東岸に橋頭堡を構築し、その結果、南西部方面軍は南北西の三方向からド

イツ軍に圧迫される。しかも、方面軍のドニエブル河東岸への性急な後退により、ウマンの第6と第12両軍も失われる恐れがある。さらに方面軍全体の撤収自体に二つの危険が伴う。一、ブシヨル河は防禦に不適。二、コノトツプ周辺でグデーリアンを阻止しなければ何をしても危険である」

それからスターリンは即時撤収の代りに以下のような選択肢を示した。

① 南西部方面軍は全兵力をもって再編してコノトツプ攻撃をエリョーメンコと協同する。

② 防禦線をブシヨル河東岸に張る。

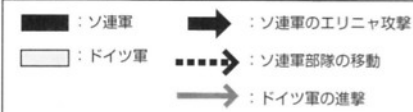
③ 以上二つを充足したうえで、キエフ放棄の用意とドニエブル河橋梁の破壊。

これを見ると、この時点でのスターリンの戦争指導の混乱ぶりが窺える。だが、キエフを失いたくないという独裁者スターリンの本心を理解しているキルポノスとしては、やむなく、最高司令部の同意なくしてはいかなる後退もしない、と約束せざるをえなかった。

そして九月十四日、エリョーメンコは再度、グデーリアン阻止のための反撃を命じられたが、これはあくまで北西のロスラウリ方向に対してであって、

*戦域軍＝戦域軍は、方面軍と戦域の両方を指揮下に入れる、いわば統合軍司令部の性格を持つ。ただし実際には「最高司令部」から方面軍へ直接に指示が与えられることが多く、無意味な指揮系統であって、1942年には廃止される。

8月17～19日頃、ドイツ第2装甲集団はクリョフ方面に進み、ソ連中央方面軍と予備方面軍の間に割り込む形となっていた。本格的にキエフ攻略に向かった第2装甲集団に対し、ブリャンスク方面軍（元中央方面軍）は攻撃を行ったが阻止することはできなかった。キエフ防衛のため、第5軍も後退していたが、この頃にはドイツ軍の攻撃によって弱体化していた。キエフ死守を命じながら十分な防衛策も立てず、南西部方面軍の撤退も許可しないという、スターリンの混乱した戦争指導が、キエフの悲劇を生み出したと言える。



スターリンがキルポノスに約束したコノトプ方向にはなかった。すでにこの時点で南西部とブリャンスク両方面軍間の間隙は六〇キロにまで広がっており、エリョーメンコも手持ちの兵力は戦車二〇両にすぎないと、最高司令部に訴える有様だった。

その二日前の十二日、クライストの第1装甲集団はクレメンチュグでドニエプル河を渡り、これに続いてドイツ

キエフ包囲戦（1941年8月17日～9月10日頃）



南方軍集団二〇個師団がソ連第28軍を圧迫しつつ北方へと進んだ。もはや第28軍には五個狙撃師団と四個騎兵師団しかなく、それ以外の友軍部隊はすべてグデーリアン阻止のために北方へ配置されていた。また、方面軍の最西端で奮戦していた第5軍も、デズナ河まで後退した時には、すでにドイツ軍が同河東岸に達しており、渡河できた兵力はほんの一部という、ほぼ壊滅状態となった。

南西部方面軍の包囲が現実となった九月十四日、南西部方面軍参謀長トゥピコフはシャポシニコフに次のような報告を打電した。

「破局はすでに始まり、数日以内に貴官にもそれは明瞭となるべし」

ところがこの悲痛な報告に対して、シャポシニコフからの返信は驚くべき内容だった。

「トゥピコフ少将は参謀本部にパニック的内容の報告を送達せり。現時点で求めらるべきは全階級指揮官の冷静沈着と自制にあり。恐慌に囚われる必要なし。重要なのは、すべての緊要地点、特に両翼面の防衛なり。そして第21、第5両軍の後退を止める要あり。方面軍の全幕僚は戦闘継続の必要を周知せ

しむべし。後方を顧みることなく、同志スターリンの命令を完遂すべし」

南西部方面軍の壊滅

九月十五日になると、南西戦域軍司令官チモシエンコも撤退の必要性を確信するようになった。十六日にポルタワの司令部にもどったチモシエンコは、方面軍作戦班長バグラミヤン（のち元帥）および軍事評議員フルシチョフと協議し、ドイツ軍による包囲完成の前に方面軍をプシオル河東岸に後退させることを決定し、バグラミヤンがキルポノスのもとに帰り、口頭で撤収を示達することになった。文書の形に示なかったのは、スターリンの意に反する決断だったからである。

十七日、ピリアティン付近でバグラミヤンからチモシエンコの指示を伝えられたキルポノスは、スターリンからの正式の許可が下りない以上、なおこの指示に従うのをためらった。バグラミヤンはあらためてモスクワに確認の打電をし、ここでようやくスターリンは方面軍の撤収を許可した。しかし、時すでに遅しであった。

この頃、グデーリアンとクライストの先鋒は合流を果たし、完全ではない

*包囲がほぼ完成＝キエフ包囲戦でのソ連側の損害は、9月27日のOKW公報によると、捕虜66万5000人、捕獲した装甲車両884台、砲3718門にのぼったという。この数字について、戦後フルシチョフ時代の公開戦史では20万人以下と下方修正されたが、今日では45万2700人が妥当な数字と認められている。

にせよ包囲がほぼ完成したのである。
*
キエフ包囲戦の総括

キエフ包囲戦が、第二次大戦でソ連最大の敗北となった主な原因は何であったのか。それは、有効な時点で南西部方面軍の後退を認めなかったスターリンの頑迷さにある。そして、スターリンがキエフにこだわった理由はすでに述べたが、そこで一つの問題が持ち上がる。

「バルバロッサ」作戦が開始される約半年前の一九四一年一月、図上演習の惨憺たる結果に驚いたスターリンは、メレツコフに代えてジューコフを参謀総長に任命した。この人事の意味するところは、スターリンがそれまでの赤軍の攻勢戦略に代えて、防御戦略に転換させる無言の合図だった。それは敵軍をソ連領内で迎え撃ち、敵が弱ったところで一気に反撃に出るというものであり、そのため、緒戦で多少のソ連領土が敵に占領されるのはやむをえない。

だが、問題はその「程度」だった。スターリンがはたしてどのくらいのソ連領土の一時放棄を容認していたかは分からない。だがせいぜい、国境から

数十キロ、どんなに譲っても旧国境の要塞線、いわゆる「スターリン線」までであったと思われる。

確かに、戦前から戦後まで一貫して、スターリンは異常なほど「土地」と「領有」に拘っている。交渉にあたつてはたとえヒトラーであろうと日本であろうと、あるいは米英であろうと、相手の如何を問わず、スターリンは貪欲なまでに領土要求を貫き通している。

しかし今、ドイツによる奇襲にさらされて、いざ防御戦略を発動しようとしても、白ロシア正面はたちまちドイツ軍に席巻されてスモレンスクも攻略された。唯一、ウクライナ正面でキルボノスが巧妙な持久戦によって敵の進撃を鈍らせるのに成功した。この情勢で、さらにキエフをはじめウクライナの大部分を放棄せよ、というのはスターリンにはとても堪えられないことであつたろう。

一方、スターリンの意をくんで防御戦略を構想していたジューコフにしてみれば、キエフもスモレンスクも時間稼ぎのための捨て石にすぎなかった。

むしろジューコフ戦略によれば、ドイツ軍はスモレンスクとキエフに到達した時点で兵站の限界に達するはずであ

り、そこを狙って総反攻に出ることになっていった。開戦前にジューコフに防御戦略の立案を託したスターリンではあつたが、いざ本当にそれが発動されると、合目的な軍事戦略の冷徹さにたじろいだのである。

結局、キエフ包囲戦で露呈したのは、スターリン体制とスターリン個人の矛盾である。早くから南西部方面軍包囲の危険性は認識できたはずなのに、ジューコフ以外の誰もキエフ放棄と方面軍の撤収を進言しなかった。粛清により軍部に対して絶対的な支配を確立したスターリンの周囲には、誰もスターリンに面と向かって直言できない「空気が」充滿していた。その最も極端かつ悲劇的な例が、南西部方面軍司令官キルボノスだったといえよう。

では、ドイツ側にとつての意義は何か。たしかにキエフ包囲戦は独ソ戦で最大の勝利となり、これをもって「バルバロッサ」作戦は終わり、以後モスクワ攻略の「台風」作戦へと移行することになる。

問題なのは、この「大勝利」が実は「ソ連側の失策」によるものだという点である。もしドイツ側がすべての面で優勢なために勝つたのなら、それは

「圧勝」である。だがこれまで見てきたように、ドイツ側の成功の原因はソ連側、ことにスターリン個人の失策にあり、これでは「僥倖」にすぎない。しかしドイツ側は、誰もがキエフ包囲戦は「圧勝」だったと信じて疑わず、満々たる自信をもってモスクワ攻略「台風」作戦に臨んだのであつた。

こうしてソ連側、ことに最高指揮官スターリンがキエフの過ちを繰り返すまいと決意し、ジューコフの献策を採用してモスクワ防衛のための強固な防御陣を構築している真只中に、ドイツ軍は突入していくことになる。そしてドイツ軍にとって「僥倖」は二度とやってこなかったのである。



ソ連軍捕虜の隊列。キエフ戦の大損害は、スターリンの頑迷さによって生じたが、以後はこうした過ちを繰り返さない決意を固めた。